

2006年度は、検体検査室と生理検査室間のパーテンションを取り除き、お互いに検査室内を見渡せる環境を作り、技師間の業務状況の把握による検査室内カバーリング体制の効率化に重点をおいた運営を行った。また、リアルタイムな情報伝達と問題解決のために、毎日の朝礼と適宜にミーティングを行うこととした。  
検査室を構成する技師は、検体検査 2.5名、生理検査 3.5名の計 6 名である。

1. 院機能評価

8月に行われた病院機能評価受審に伴い、検査室内のレイアウト変更、業務整備、マニュアル作成等様々な対応と意識改革に取り組んだ。受審に関しては大きな問題は無かったが、今後の取り組みに対する検査室内の課題も幾つか見つかった。今後は必要に応じてマニュアルの改編や運営等に適宜対応し、より質の高い業務整備を心がけていきたい。

2. 検体検査

(1) 検体検査システム

前年度末に導入された検体検査システムは、検査業務の効率化と省力化、臨床データ管理と結果報告の迅速化に貢献しているが、さらに細かな運用設定を見直して、きめこまやかな臨床側へのフィードバックを図りたい。

(2) 感染管理

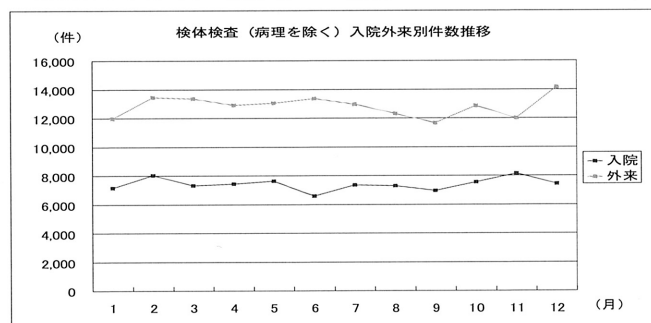
細菌培養結果を集計処理し、週報・月報・半期・年報を医局並びに院内感染対策委員長へ提出し、同委員会にて感染症対策の資料としている。別にインフルエンザと感染性胃腸炎の発生状況の統計情報も併せて院内メールにて配信している。ICT活動の支援など院内感染対策に役立てていきたい。

(3) 情報の提供

NST 回診のために低栄養状態の指標を、高脂血症のデータも併せて抽出し、関連部署（病棟・栄養管理室・リハビリ部）に報告を行っている。ICT 回診においては、検査データを抽出し回診前日に報告を行っている。また DM 教室では前年度に引き続き検査技師も講義に参加している。

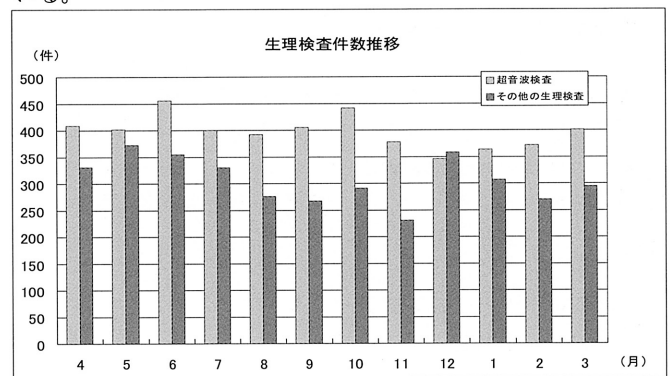
外部向け勉強会を以下の通り開催した。

- 細菌検査について医事室向けに検査の流れと保険点数の執り方の説明
- 検体システムの他部署への説明



3. 生理検査

今年度は超音波検査において、超音波機器の 1 台新規追加導入により 3 台体制での対応となった。このため以前からの課題であった外来患者検査の待ち時間短縮と、午前中の予約外検査のスムーズな受け入れが可能となり、業務効率が格段に上がった。新たに業務範囲の拡大が可能となり、手術室で泌尿器科医師の経直腸超音波検査介助を行い、前立腺生検や TURP 術中の前立腺容量評価など、術前・術後の検査に大きく貢献できる体制を整えることが出来た。またその他の術中エコー検査、肝生検、PTCD 等にも積極的に対応を行っている。



4. 学術活動

今年度は第17回心エコー学会学術集会、日本超音波医学会九州地方会において演題発表を行った。また、日本超音波医学会認定超音波検査士試験に泌尿器科領域 2 名、体表臓器領域 1 名が合格した。前年度に引き続き 2 カ月に 1 度おれんじ勉強会を開催した。

5. 今後の課題

開院から 4 年が経過し、旧国立病院からの譲渡機材等の更新計画を策定し、検査システムの完全なオーダーリング体制移行も中長期的に計画していきたい。加えて、超音波検査担当技師の退職に伴う、新規採用技師を含めた超音波検査担当技師の育成に力を入れていくことが最大の課題となっている。